

現代のスポーツシーンに見る“音楽”に関する研究
～スペクテーター・スポーツにおける応援歌に着目して～
A Study of “Music” in the Contemporary Sports Scene:
The Rooters’ Songs of Spectator Sports

1K07B012-6 飯田 龍仁

指導教員 主査 リー・トンプソン教授 副査 宮内 孝知教授

【目的】

現代のスポーツにおいてあらゆる場面でごく当たり前のようにその姿を見せる“音楽”について、特に、高橋が言うところの「スポーツ競技を見て楽しむスペクテーター（観客）を前提として行われるスペクテーター・スポーツ」[高橋、2011]の「スタジアムで共有される大合唱」[山田、2003]、即ちファン・サポーターたちが奏でる、歌や手拍子、楽器を使った応援という名の“音楽”に着目した。

このような、“スポーツ”と“音楽”という一見すると全く異なる2つの文化に特化し、その関連性に焦点を当てた本格的な研究は、これまでにはほとんど為されてこなかった。故に、特にスポーツシーンに登場する“音楽”を足掛かりとして研究し、その重要性や不可欠性について検証することができれば、有意義な研究に繋がり結果的に一定の研究成果を挙げることができるとともに、本研究がスポーツ社会学と音楽社会学の橋渡しに微力でも貢献することができると考え、このテーマに決めた。

【方法】

まず、現代の日本においてポピュラーなスペクテーター・スポーツである野球とサッカーに的を絞った上で、スポーツシーンに溢れているあらゆる音楽を、実際の使用例も挙げながらピックアップし分類した。そして、4つに分類した中から、ファン・サポーターが繰り広げる応援という“音楽”を本研究の研究対象として抽出した。

その、ファン・サポーターが繰り広げる応援という“音楽”の研究方法については、新聞も含めた文献調査に加え、2人の私設応援団リーダーへのインタビュー調査、そして、有益な情報を入手するためにウェブサイトの閲覧も研究方法の一つとした。

【内容】

研究の導入としてまず、スタジアムで共有される大合唱について、イングランド・プレミアリーグの

リヴァプール FC のサポーターが大合唱することで有名な「You'll Never Walk Alone」と、アメリカ・メジャーリーグの試合においてファンによって合唱される「Take Me Out to the Ball Game」を検証対象に挙げ、各々の音楽の誕生経緯とどのような性格を持つ音楽なのかを検証し、それらの音楽が「野球やフットボールのスタジアムで共有される大合唱の経験のように、一見すると自発的なボランティアによる音楽経験の共有と思われるような状況も、少なくとも現代においては民俗的な伝統に依拠するものではなく、制度的に用意された商品の一部」[山田、2003]であるという分析結果を導き出した。

続いて、ファン・サポーターが奏でる、歌や手拍子、楽器を使った応援の具体的な事例として、日本のサッカー・Jリーグに加盟する清水エスパルスの、応援に“サンバ”を取り入れた特徴的な私設応援団にスポットを当て、初代私設応援団「シャペウランジャ」が“サンバ”を応援に取り入れることとなった経緯、ブラジルで興隆した“サンバ”そのものの起源とサッカーとの密接な関係性、そして現在の私設応援団「エスパルスサンバ隊」の応援スタイルについて、インタビュー調査や文献調査を通じてその中身を明らかにした。

【考察】

「野球やサッカーのスタジアムで共有される大合唱」[山田、2003]、即ち応援という名の“音楽”が、全ての応援の中心になっているということ、その応援という名の“音楽”がスタジアムで繰り広げられる応援の秩序を形成する存在になっているということ、そして、カイヨワの『遊びと人間』における遊びのカテゴリーの一つである「イリンクス」とスタジアムでの応援とを関連づけるとともに、人間関係が希薄化する現代において、応援という名の“音楽”が人々を繋ぐ大きなコミュニケーション・ツールになっているということを見出すことができた。